

旅僧

泉鏡花

青空文庫

上

去にし年秋のはじめ、汽船加能丸の百餘の乗客を搭
 載して、加州金石に向ひて、越前敦賀港を發するや、一
 天麗朗に微風船首を撫でて、海路の平穩を極めたるにも
 關はず、乗客の面上に一片暗愁の雲は懸れり。
 蓋し薄弱なる人間は、如何なる場合にも多くは己を恃む
 能はざるものなるが、其の最も不安心と感ずるは海上なら
 む。

然れば平日然までに臆病ならざる輩も、船出の際は兎や角

と縁起えんぎを祝いはひ、御幣ごへいを擔かつぐも多おほかり。「ひとりをんな ひとりぼうず
一人女」 「一人坊主」

は、暴風あれか、火災くわさいか、難破なんぱか、いづれにもせよ危険きけんありて、船ふね

を襲おそふの兆てうなりと言いひつた傳へて、船頭せんとうは太いたく之これを忌いめり。其日そのひの

加能丸かのうまるは偶然ぐうぜん一人にんの旅僧たびそうを乗のせたり。乗客じようかくの暗愁あんしうと

は他たなし、此この不祥ふしやうを氣遣きづかふにぞありける。

旅僧たびそうは年紀とし四十二三、全身ぜんしん黒く瘦やせて、鼻隆はなたかく、眉濃まゆこく、

耳許みもとより頤おとがむとがひ、頤はなより鼻したの下まで、短みじかき髭ひげは斑まだらに生おひたり。懸かけ

たる袈裟けさの色いろは褪あせて、法衣ころもの袖そでも破やぶれたるが、服装いでたちを見れば

法華宗ほつけしうなり。甲板デツキの片隅かたすみに寂じやくまく寞まくとして、死灰しくわいの如ごとく踏ふ

坐ざせり。

加越地方かゑつちほうは殊ことに門徒もんとしん眞宗しんしう、歸依者きえしやおほ多おほければ、船中せんちうの客きやくも又また

門徒七八分を占めたるにぞ、然らぬだに忌はしき此の「一人坊主」の、別けて氷炭相容れざる宗敵なりと思ふより、乞食のごとほつけそう、恰も加能丸の滅亡を宣告せむとて、惡魔の遣はしたる使者としも見えたりけむ、乗客等は二人三人、彼方此方に額を鳩めて呶々しつゝ、時々法華僧を流眊に懸けたり。

旅僧は冷々然として、聞えよがしに風説して惡様に罵る聲を耳にも入れざりき。

せめては四邊に心を置きて、肩身を狭くすくみ居たらば、聊か恕する方もあらむ、遠慮もなく席を占めて、落着き澄したるが憎しとて、乗客の一人は衝と其の前に進みて、

「御出家、今日の御天氣は如何でせうな。」

旅僧は半眼に閉ぎたる眼を開きて、

「さればさ、先刻から降らぬから、お天氣でござらう。」と言ひ

つゝ空を打仰ぎて、

「はゝあ、是はまた結構なお天氣で、日本晴と謂ふのでござ

る。」

此の暢氣なる答を聞きて、渠は呆れながら、

「そりや、誰だつて知つてまさ、私は唯急に天氣模様が變つて、

風でも吹きやしまいかと、其をお聞き申すんでさあ。」

「那樣事は知らぬな。私は目下の空模様さへお前さんに聞か

れたので、やつと氣が着いたくらゐぢやもの。いや又雨が降らう

が、風かぜが吹ふかうが、そりや何なにもお天てん氣き次第しだいぢや、此方こつちの構かまふこつちや無ないてな。」

「飛とんだ事ことを。風かぜが吹ふいて耐たまるもんか。船ふねだ、もし、私等御わつしらごどう同やう様に船ふねに乗のつて居ゐるんですぜ。」

と渠かれは良怒やいかりを帶おびて聲こゝろ高たかになりぬ。旅僧たびそうは少しも騷さわがず、
 「成程なるほど、船ふねに居ゐて暴風雨あゐれに逢あへば、船ふねが覆かへるとでも謂いふ事ことかの。」

「知しれたこつたわ。馬鹿ばか々々ノノしい。」
 渠かれの次第しだいに急せき込むほど、旅僧たびそうは益ますす落着おちきぬ。

「して又また、船ふねが覆かへれば生命いのちを落おさうかと云いふ、其その心配しんぱいかな。
 いや詰つまらぬ心配しんぱいぢや。お前まへさんは何なにか（人相見にんさうみ）に、水難すゐなん

の相さうがあるとしても言いはれたことがありませんか。まづく聞ききなさい。さも無なければ那様そんなことを恐こはがると云いふ理窟りくつがないて。一いつた體いお前まへさんに限かぎらず、乗合のりあひの方かた々々も又また然さうぢや、初手しよてから然さほど生命いのちが危けん険のんだと思おもつたら、船ふねなんぞに乗のらぬが可いいて。また生命いのちを介かまはずに乗のつた衆しうなら、風かぜが吹ふかうが、船ふねが覆かへらうが、那様そんなこと事に頓とんぢやく着は無ない筈はずぢやが、恚かう見渡みわたした處ところでは、誰方どなたも怯びく々々もので居ゐらるゝ様子やうすぢやが、さてく笑止せうしせんばん千萬ばんな、水みづに溺おぼれやせぬかと、心配しんぱいする様やうな者は、何どの道みちはや平生へいぜいから、後生ごしやうの善いい人ひとではあるまい。

先まづ人ひとに天てん氣きを問とはうより、自じ分ぶんの胸むねに聞きいて見みるぢやて。

(己おのれは難なん船せんに會あふやうなものか、何どうぢや。)と、其處そこで胸むねが、

(お前は随分罪を造つて居るから何うだか知れぬ。)と恚う答へられた日にや、覺悟もせずばなるまい。もし(否、悪い事をしおぼえ)た覺もないから、那樣氣遣は些とも無い。)と恚うありや、何の雨風ござらばござれぢや。喃、那樣ものではあるまいか。

して見るとお前さん方のおどくするのには、心に覺束ない處があるからで、罪を造つた者と見える。懺悔さつしやい、發心して坊主にでもならつしやい。(一人坊主)だと言つて騒いでござるから丁度可い、誰か私の弟子になりなさらんか、而して二人坊主が出来りや、もう(一人坊主)ではなくなるから、頓と氣が濟んで可くござらう。」

斯く言ひつゝ、法華僧は哄然と大笑して、其まゝ其處に肱

ぢまくら
枕ねむして、乗客等のりあひらがいかいかに怒りしか、いかのゝしに罵りしかを、渠かれは
眠りて知らざりしなり。

下

愆かくて、數時間すうじかんを經たりし後のち、身邊あたりの人聲ひとごゑの騒さわがしきに、旅た
僧びそうは夢破ゆめやぶられて、唯見とみれば變かはり易やすき秋あきの空そらの、何時いつしか一面いちめん
搔かきくも曇りて、暗澹あんたんたる雲くもの形かたちの、凄すさまじき飛ひてん天や夜や叉やの如ごときが縦じうわ
横無盡うむじんに馳はせまはるは、暴風雨あらしの軍いくさを催もよほすならむ、其一團そのいちだんは早はや
く既にすで沿岸えんがんの山やまの頂いたゞに屯まゐせり。

風かぜ一ひと陣しきり吹ふき出いでて、船ふねの動どう搖えう良や激はげしくなりぬ。愆かくの如ごとき

ふううん 風雲は、かとうまるきわう 加能丸既往の かうかいしじやうめづら 航海史上珍しからぬ げんしやう 現象なれども、(ひとりぼうず) の ぜんてう 前兆に 因りて おくそく 臆測せる 乗客は、かゝる 現象を以て 推すべき、ふうう 風雨の 程度よりも、むし 寧ろ 幾十倍の 恐を抱きて、 渠さへあらずば 無事なるべきにと、 各々 我命を惜む餘に、 其死を欲するに至るまで、 怨恨骨髓に 徹して、 此の法華僧を 憎み合へり。

ふかう 不幸の僧は つく／＼ 此状を し、 慨然として、
 「あゝ、末世だ、情ない。皆が皆で、 恚う又信仰の 弱いといふは何うしたものぢやな。 此處で死ぬものか、死なないものか、自分で 判断をして、 活きると思へば 平氣で可し、死ぬと思や 靜に 未來を考へて、 念佛の一つも 唱へたら何うぢや、 何方にした處

が、わい／＼騒ぐことはない。はて、見苦しいわい。

然し私も出家の身で、人に心配を懸けては濟むまい。可し、

可し。」

と渠は獨り領きつゝ、從容として立上り、甲板の欄干に

凭りて、犇ぎ合へる乗客等を顧みて、

「いや、誰方もお騒ぎなさるな。もう斯うなつちや神佛の信

心では皆の衆に埒があきさうもないに依つて、唯私が居なけれ

ば大丈夫だと、一生懸命に信仰なさい、然うすれば屹度

助かる。宜しいかく。南無、」

と一聲、高らかに題目を唱へも敢へず、法華僧は身を躍

らして海に投ぜり。

「身投だ、助けろ。」

船長の命の下に、水夫は一躍して難に赴き、辛うじて法華僧を救ひ得たり。

然りし後、此の（一人坊主）は、前とは正反對の位置に立ち、乗合をして却りて我あるがために船の安全なるを確めしめぬ。

如何となれば、乗客等は爾く身を殺して仁を爲さむとせし、此大聖人の徳の宏大なる、天は其の報酬として渠に水難を與ふべき理由のあらざるを斷じ、恚る聖僧と與にある者は、此結縁に因りて、必ず安全なる航行をなし得べしと信じたればなり。良時を経て乗客は、活佛——今新たに然

か思へる——の周圍に集りて、一條の法話を聞かむことを希へり。漸く健康を回復したる法華僧は、喜んで之を諾し、うちしはぶ打咳きつゝ、語出しぬ。

「私は一體京都の者で、毎度此の金澤から越中の方へ出懸けるが、一度ある事は二度とやら、船で（一人坊主）になつて、乗合の衆に嫌はれるのは今度がこれで二度目でござる。今から二三年前のこと、其時は、船の出懸けから暴風雨模様でな、風も吹く、雨も降る。敦賀の宿で逡巡して、逗留した者が七分あつて、乗つたのはまあ三分ぢやつた。私も其時分は果敢ない者で、然云ふ天氣に船に乗るのは、實は二の足の方であつたが、出家の身で生命を惜むかと、人の思はくも恥かしくて、怯氣々

々のりこもので乗込みましたぢや。さて段々だんく船ふねの進むほど、風かぜは荒あらくなる、波なみは荒あれる、船ふねは揺ゆれる。其その又また揺ゆれ方かたと謂いうたらひととほり一通つうでなかつたので、吐はくやら、呻うめくやら、大おほく苦くるみで正しやうたい體たいなものが却かへつて可うらやま羨ましいくらゐ、と云いふのは、氣きの確たしかなものほど、生命いのちが案あんじられるでな、船ふねが恚かうぐつと傾かたむたび、はツつくと冷つめたい汗あせが出る。さてはや、念ねん佛ぶつ、題だい目もく、大おほ聲こゑに鯨とき波こゑの聲こゑを揚あげて唸うなつて居ゐたが、やがて其それも蚊かの鳴なくやうに弱よわつてしまふ。取とりみだりみだ亂ものさぬ者ひとりは一人ひとりもない。

恚かう云いふ私わしが矢や張はりその、おいなく泣ないた連れん中ちゆうでな、面めん目ぼくもないこと。

昔むか彼のかの文もん覺がくと云いふ荒あら法ほふ師しは、佐さ渡どへ流ながされる船みち路ちで、暴あ風あ

雨れに會あつたが、船頭せんどう水夫かこども共どもが目めの色いろを變かへて騒さわぐにも頓とんぢやく着やく

なく、大だいの字じなりに寢ねそべつて、雷らいの如ごとき高たかい 鼾いびきぢや。

すると船頭せんどう共どもが、「恁こんな 惡あく僧そうが乗のつて居ゐるから龍神りうじんが崇たう

るのに違ちがひない、疾はやく海うみの中なかへ投なげ込んで、此方こち人等とらは助たすからう。」

と寄よつて集たかつて文もん覺がくを手籠てごめにしようとする。其時そのとき荒坊あらぼう主岸ずが

破ぼと起おき上あがり、舳へさきに突立つつて、はつたと睨ねめ付つけ、「いかに龍りうじ

神んぶれい不禮れいをすな、此船このふねには文もん覺がくと云いふ法華ほつげの行ぎやう者じやが乗のつて

居ゐるぞ！」と大音だいおんに叱しかり付つけたと謂いふ。

何なんと難ありがたい信しん仰かうではないか。強つよい信しん仰かうを持もつて居ゐる法師ほふし

であつたから、到底たうてい龍神りうじん如ごときがこの俺おれを沈しづめることは出で來きな

い、波浪はらうふのうもつ不能ふのうもつ沒つだ、と信しんじて疑うたがはぬぢやから、其處そこでそれ自じじや

若くとして居られる。

又死んでも極樂へ確に行かれる身ぢやと固く信じて居る者は、
 恁云ふ時には驚かぬ。

まあ那樣事は措いて、其時船の中で、些とも騒がぬ、いや
 も頓と平氣な人が二人あつた。美しい娘と可愛らしい男の兒ぢや。
 ※弟と見えてな、似て居ました。

最初から二人對坐で、人交もせぬで何か睦まじさうに
 話をして居たが、皆がわい／＼言つて立騒ぐのを見ようともせ
 ず、まるで別世界に居るといふ顔色での。但金石間近にな
 つた時、甲板の方に何か知らん恐しい音がして、皆が、きやツ！
 と叫んだ時ばかり、少し顔色を變へたぢや。別に仔細もなかつた

と見^みえて、其^{その}内^{うち}静^{しづ}まつたが、※弟^{きやうだい}は立^たちさうにもせず、まことに常^{つね}の通^{とほ}りに、澄^{すま}して居^ゐたに因^よつて、餘^{あま}り不^ふ思^し議^ぎに思^{おも}うたから、其^{その}日^ひ難^{なん}なく港^{みなと}に着^ついて、※弟^{きやうだい}が建^{きやうだい}場の茶^{ちや}屋^やに腕^{くるま}車^まを雇^{やと}ひながら休^{やす}んで居^ゐる處^{ところ}へ行^いつて、言^{こと}葉^ばを懸^かけて見^みようとしたが、其^{その}子^こ達^{だち}の氣^けだか^{たか}たふと高^{たか}さ！貴^かさ！思^{おも}はず此^この天^{あたま}窓^{まど}が下^さつたぢや。

そこで土^ど間^まへ手^てを支^{つか}へて、「何^どういふ御^ご修^{しゆ}行^{ぎやう}が積^つんで、あのやうに生^{しやう}死^じの場^{ばあ}合^ひに平^{へい}氣^きでお在^いなされた」と、恐^{おそれ}入^いつて尋^{たづ}ねました。

すると答^{こた}へには、「否^い、私^{わたし}等^らは東^{とう}京^{きやう}へ修^{しゆ}行^{ぎやう}に參^{まゐ}つて居^ゐるものでござるが、今^{こん}度^ど國^{くに}許^{にもと}に父^{ちち}が急^{きふ}病^{びやう}と申^{まを}す電^{でん}報^{ぱう}が懸^かつて、其^{それ}で歸^{かへ}るのでござるが、急^{いそ}いで見^み舞^まはんければなりませんの

で、止むを得ず船にしました。しかし父様には私達二人
 の外に、子と云ふものはござらぬ、二人にもしもの事があります
 れば、家は絶えてしまひます。父様は善いお方で、其きり
 跡の斷えるやうな悪い事爲置かれた方ではありませんから、私ど
 もは甚どんあぶな 危こほい恐めい目に出會であひましても、安あんしん心でございます。そ
 れに私が危わたくしあやふければ、此この弟が助たすけてくれます、私もまた弟一人は
 殺ころしません。其それで二人とも大だい丈夫ぢやうぶと思おもひますから。少すこしも恐こほ
 はござらぬ。「と恚かう云いふぢや。私わしにはこれまで讀よんだ御おき經やう
 り、餘よつほど程あり難がた有なくて涙なみだが出でた。まことに善ぜん知ち識しき、そのお底か
 大おほきに悟さとりました。

乗のり合あひの衆しうも何なにがなしに、自じ分ぶんで自じ分ぶんを信しん仰かうなさい。船ふねが大だ

いぢやうぶ
 丈夫と信じたら乗つて出る、出た上では甚※だと安心がならぬ、人を恃むより神佛を信ずるより、自分を信仰なさるが一番ぢや。」

ふねみなと
 船の港に着きけるまで懇に説聞かして、此殺身爲仁の高僧は、飄然として其名も告げず立去りにけり。

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二」岩波書店

1942（昭和17）年9月30日第1刷発行

1973（昭和48）年12月3日第2刷発行

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2005年10月28日作成

2011年3月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

旅僧

泉鏡花

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>